地理歴史科　歴史総合　学習指導案

指導教員　　氏名 [redacted]

実習生　　氏名 [redacted]

1. 日時：令和４年６月８日（水）１限目（8：50～9：35）

2. 学級：[redacted]年[redacted]組

3. 場所：[redacted]年[redacted]組教室

4. 教材：歴史総合　私たちの歴史日本から社会へ（山川出版社）

5. 単元計画

〈第１部　近代化と私たち〉

１　18 世紀の世界とアジア・・・・・・・・・１時間

考えてみよう　琉球と蝦夷地・・・・・・・・１時間

２　産業革命・・・・・・・・・・・・・・・・１時間

３　アヘン戦争と日本・・・・・・・・・・・１時間

４　日本の開国・・・・・・・・・・・・・・・１時間

考えてみよう　江戸時代・・・・・・・・・・１時間

５　日本開国期の国際情勢・・・・・・・・・２時間（本時１時間目）

６　開国後の日本社会・・・・・・・・・・・１時間

７　市民革命と国民統合・・・・・・・・・・１時間

6. 教材観

本教材では、日本史と世界史どちらの内容も扱う教材となっている。そのため、日本史や世界史の教材では専門的な内容を深く掘り下げているものに対し、本教材は浅く広い内容を取り扱っている認識である。日本開国期の国際情勢の内容でも、清・ロシア・アメリカで同時期におきた戦争を取り扱っている。そのため、扱う内容や、覚える背景も多くなっている。一つ一つの内容に対して丁寧に説明することを心がける必要がある。

7. 生徒観

本クラスの生徒は比較的穏やかで真面目である。授業に対する姿勢や、授業内容をノートにとることは非常に熱心である。一方で、発問や質問に対する反応は良いとは言えず、発問や質問をするときは聞き方を工夫する、答えに近づくことができるような声かけが必要になる。また、歴史に対する意識が高いと言えるような生徒は多くなく、時間がたつにつれての集中力の低下が目立つ。適当な時間での生徒に考えさせるような発問が重要になる。ノートをとるスピードにかなりの個人差があるため、生徒の反応を見て授業を進めていかなければならない。

8. 指導観

18 世紀頃から 19 世紀頃に起こった「西洋の衝撃」につながったとされる産業革命などの経緯を理解し、アジア諸国が欧米諸国に対して感じたとされる気持ちを考えさせる。当時アジアの地域の代表ともいえる清で起きた出来事を説明すると共に、その出来事がおきた背景を地図や資料を参考に考えさせる。日本史の範囲を行った後に、すぐに世界史の範囲に移るため、多角的な視野でこの時代であった事象を正確に学ばせる必要がある。

9. 単元の目標

・日本や世界が歩んできた歴史を学習し理解する。

・近代化に向けて起こった出来事の背景を考察し理解する。

10. 本時の目標

・日本開国期に国際情勢を知り、それぞれの問題が何故起きたのか背景を理解する。(A. B)

・当事者である国が感じていたことについて考察し、自分なりの意見を発表する。(B. C)

11. 評価規準

A) 知識および技能

日本開国期の知識の理解、教科書の地図や資料を読み取ることができる。

B) 思考・判断・表現等

各国がとった行動の理由を考え、自分なりの意見をまとめることができる。

C) 主体的に学習に取り組む態度

積極的に話すことができる。周りの生徒と協調しコミュニケーションをとることができる。

12. 本時の計画

	指導内容・評価	生徒の活動	留意点
導入（8分）	○出欠をとる。(3分)	・名前を呼ばれたら、返事をする。	・名前を間違えることなく行う。
	○復習を行う。(5分) ・「ペリーが浦賀に来航し、日米和親条約を結ぶ。日米和親条約の内容、下田と箱館の開港、最恵国待遇の義務」の範囲を問題形式で答えさせる。(A) ・「ハリスに日米修好通商条約を締結させられる。関税自主権の欠如と領事裁判権を認める」範囲を問題形式で答えさせる。(A)	・復習の内容を聞き、前回及び前々回の範囲について思い出す。 ・教科書・ノートの振り返りを行う。	・復習の内容であるため、深くは掘り下げず、ある程度の確認である事を理解しておく。
	・教科書38. 39ページ開かせる。		・今何をしなければならないのかを具体的に、はっきり伝える。

日本が開国を求められていたとき同様に、アジア諸国でも・・・

展開30分	○西洋の衝撃（10分） ・西洋の衝撃（ウエスタンインパクト）を板書する。	・前々回学んでいた範囲である、日本が開国を求められていた同時期に、アジア諸国でも同様のことが起きていたことを理解する。 →ノートをとる。	・欧米諸国が強くなった理由である産業革命を補足で説明する。 →欧米諸国のアジア進出により、軍事力・政治・文化など様々な面でアジアに衝撃を与えたことを補足する。
	問　当時のアジアの国の気持ちを考え 支配されたら自分ならどんな行動に出るか		
	・発問を隣の人と２～３分程度考えさせる。（B．C） ・発表させる。（B）	・隣の人と話し合う。 〈予想される反応〉 ・戦う、撃退する、反乱する ・強い国をまねる →発表をする。	・机間巡視を行い、話し合えていない生徒がいないか確認する。 ・発表を聞く姿勢になっているか確認する。
	・アジアが欧米の列強をモデルとし政治や軍事制度を改めたこと説明をする。 ・不満がたまっていた国では、反乱が起き、一つの例であるインド大反乱が起こることを板書する。 ○太平天国と第２次アヘン戦争（20分） ・太平天国、指導者洪秀全を板書する。	・なぜアジアが欧米諸国をモデルにしたのかを理解する。 →ノートをとる。 →ノートをとる。	・生徒の発問への考えの順番に応じて、板書と説明の順番を変える。 ・この時代、清では困った事が２つあったことを説明する。 ・アヘン戦争の復習も含めて三角貿易、南京条約を結んだ流れとその内容も黒板を使っ

			て説明する。
	・洪秀全は神の声が聞こえ、清を滅ぼし天国を作れと通達があった事、アヘン戦争により重税に苦しんでいた農民を指導したことを説明する。	・太平天国ができた経緯の説明を聞き、理解をする。	
	・三角貿易の 3 ヶ国に関する質問をする。また、貿易の内容についても質問をする。(A)	・生徒はノートや教科書を振り返りながら答える。 ※教科書 32 ページ左下の図を参考にさせる。	・生徒の様子を見て、教科書 32 ページに記載されている事を伝える。
	・清に対して蜂起し、南京を占領したことを板書する。	→ノートをとる。	・第 2 次アヘン戦争後のイギリスが関係してくるため、結果は次回に説明をすることを伝え、次に入ることを説明する。
	・第 2 次アヘン戦争の内容を板書し説明する。	→ノートをとる。 ・第 2 次アヘン戦争の背景を覚える。(名前としてアロー戦争の方が主流であるため、アロー戦争と聞くと背景が浮かび上がるようになるように理解する)	・国家間の戦争には、必ず背景があり、勝敗がつくと条約が結ばれるので、戦争名・背景・条約をセットで覚える様に促す。 ・アロー号にちなんで、アロー戦争とも言うことを伝える。 ・アロー号事件の内容も補足する。
	・背景の板書をする。	→ノートをとる。	
	・北京条約を締結することを板書する。	→ノートをとる。	
	・教科書の 38 ページに北京条約の内容が書かれている為、ラインを引かせる。(A)	・北京条約の内容に目を通し、教科書の内容にラインを引く。	
	・11 港のうちに南京など、太	・教科書 38 ページの 19 世紀	・指定している場所を開かせ

	平天国に占領された地域があったことを地図を使って確認する。(A．B) ・イギリスは太平天国を敵とし、清に協力する。また、イギリスやアメリカは清を植民地にしようと考えていたため常勝軍を結成し、太平天国を滅ぼしたことを板書とともに説明する。	後半の世界と書かれた地図を見て理解する。 →ノートをとる。 ・太平天国が滅んだ理由について理解する。	る。 ・黒板に地図を書いて補足する。 ・イギリスが清に味方した理由は、植民地にしようと考えていただけではないことを説明し、もう一つの理由を発問として考えさせるようにする。
	問　何故イギリスは清に味方をしたのか。		
	・発問を隣の人と２～３分程度で地図を見ながら考えさせる。(A．B．C) ・発表させる。(B) ・清は西洋をモデルにしたことを理解する。　→洋務運動を板書する。	・地図を見て隣の生徒と話し合う。 〈予想される反応〉 ・分からない ・開港した港の場所の一部を太平天国が占領していた。 ・発表する。 →ノートをとる。 ・洋務運動の理解。	・机間巡視を行い、話し合えていない生徒がいないか確認する。 ・発表を聞く姿勢になっているか確認する。 ・日本もモデルとしていた事を説明する。 →蕃書調所
まとめ7分	・本日のまとめをする。 ・次に出てくる、クリミア戦争やアメリカの南北戦争について、触れる。 →時間があれば、教科書38ページの地図を見ながらどこで何が起きるのかを説明する。(A)	・教科書の地図を見て、地理的な関係について知る。	・本時の内容が、次回の授業に対してどの様な形でつながっていくのかを伝える。

【板書計画】

日本開国期の国際情勢

「西洋の衝撃」とアジア諸地域

・西洋の衝撃（ウエスタン＝インパクト）

・・・欧米諸国がアジアに侵攻

・インド大反乱・・・列強の支配に対しムガル帝国で反乱

太平天国と第２次アヘン戦争

・太平天国・・・指導者：洪秀全

清に対し蜂起し、南京を占領

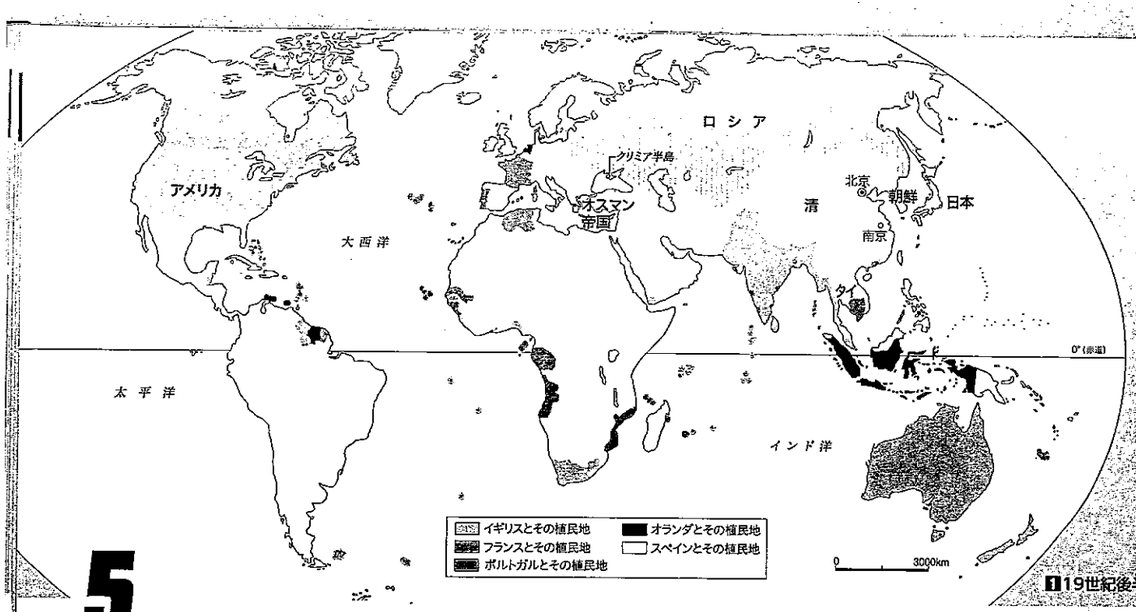
・第２次アヘン戦争・・・イギリス・フランス VS 清

背景：南京条約後も利益上がらず・・・。

→　北京条約を締結

・常勝軍が清に協力　→　太平天国を滅ぼす

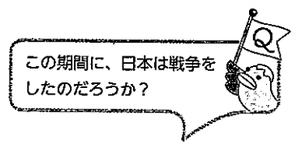
・清は西洋をモデルにする（洋務運動）



1 19世紀後半の世界

5 日本開国期の国際情勢

日本が開国した頃、世界各地で戦争や反乱がおきていた。このことは、日本にどのような影響を与えたのだろうか？



1840	アヘン戦争(～42)
1846	アメリカ＝メキシコ戦争(～48)
1848	フランス二月革命 →王政が打倒され、共和政成立。 ヨーロッパ各地で革命運動(1848年革命) 外国勢力の支配が強まるイランで、バーブ教徒の反乱(～52)
1851	太平天国の蜂起(～64)
1853	ペリー来航 クリミア戦争(～56)
1854	日米和親条約調印
1856	第2次アヘン戦争(～60)
1857	インド大反乱(～59) メキシコ内乱(～67)
1858	日米修好通商条約調印 フランスのインドシナ出兵(～67) →フランス領インドシナ連邦の成立(87)
1861・	フランス・イギリス・スペインのメキシコ出兵(～67) 南北戦争(～65)

2 日本の開国期に世界でおきたおもな事件

「西洋の衝撃」とアジア諸地域

18世紀半ばにイギリスで始まった産業革命は、—p.30～3119世紀末までには西ヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国にもおよんだ。科学技術が発達し、軍事力を高めた欧米諸国は、武力を背景にアジア諸地域へ進出していった。[1][2] アジア諸地域は、欧米諸国の武力進出(「西洋の衝撃〈ウエスタン＝インパクト〉」)に対して、欧米諸国をモデルに政治や軍事制度を改めようと試みた。

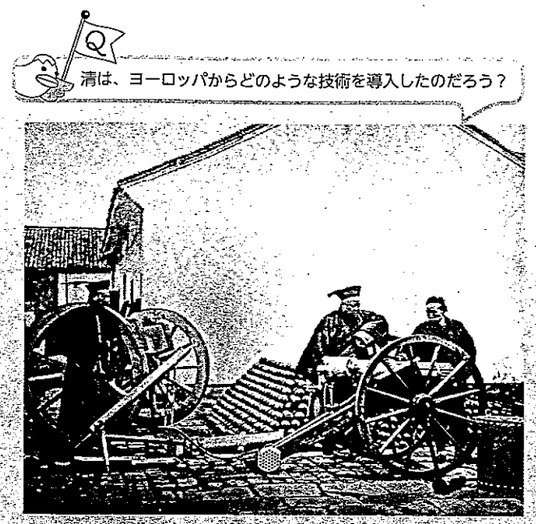
一方、列強の支配に対し、一般民衆も含めた幅広い階層の人々による抵抗運動がおこることもあった。たとえば、イギリスが進出したムガル帝国(インド)では、1857年にインド大反乱がおこった。

太平天国と第2次アヘン戦争

清ではアヘン戦争後、—p.33戦費や賠償金の負担が民衆の生活を苦しめ、社会不安が大きくなっていった。こうしたなか、キリスト教の独自の理解にもとづいて、1851年に建てられた太平天国は、清に対して蜂起し大勢力となり、53年には南京を占領した。

一方、イギリスは南京条約後も中国貿易の利益が思ったほど上がらなかったため、—p.331856年にフランスとともに**第2次アヘン戦争**をおこした。両国は60年に北京を占領して、清とのあいだに北京条約を結んだ。

この条約で、清は外国公使の北京駐在、天津など11港の開港、キリスト教布教の自由などを認めた。この間、太平天国は内部の権力争いから衰えはじめた。第2次アヘン戦争が終結すると、イギリスなどの列強は清を支持する方が自国に有利な状況をもたらすと考えるようになり、外国人を指揮者として組織された常勝軍が清に協力し、太平天国と戦った。1864年に太平天国が滅びたあと、清は西洋の学問や技術を導入し、富国強兵をめざすようになった(洋務運動)。[3]



3 洋務運動のなかで設立された兵器工場

4 リンカン　南北戦争中、リンカンはゲティスバーグで演説をおこない、南北戦争は万人が平等の原理にもとづく国家が存続するうえでの試練であるとみなして、「人民の、人民による、人民のための政治」を訴えた。

アメリカは、第2次アヘン戦争を理由として、日本に対し早く修好通商条約を調印するようせまった。—p.35

クリミア戦争と南北戦争

18世紀以来、ロシアは冬でも凍らない港を求めて南下政策を進めており、1853年、オスマン帝国に侵攻した。イギリスは、ロシアの南下政策でインド支配がおびやかされることを警戒し、フランスとともにオスマン帝国を支援して、ロシアの南下を阻止した(クリミア戦争)。[6]

クリミア戦争では極東地域でも戦闘がおこり、日本に開国を求めるロシア使節の行動はおさえられた。

アメリカでは、独立後も連邦のあり方や経済政策、奴隷制度の拡大などをめぐって北部の州と南部の州の対立が続いていた。—p.421860年に奴隷制度の拡大に反対する共和党の**リンカン**[4]が大統領に当選すると、奴隷制度の存続をめざす南部の州はアメリカ合衆国から離脱し、61年、アメリカ連合国を結成した。リンカンはアメリカの分裂を認めず、同年、**南北戦争**[5]が勃発した。アメリカ史上もっとも戦死者が多かったとされる南北戦争は北部の勝利で終わり、戦後は国内の統一と整備が最重要課題となったため、アメリカのアジア進出は、一時消極的になった。

5 ゲティスバーグ演説

87年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、人はみな平等につくられているという信条にささげられた新しい国家を、この大陸に誕生させた。

今われわれは、一大内戦のさなかにあり、戦うことにより、自由の精神をはぐくみ、自由の心情にささげられたこの国家が、あるいは、このようなあらゆる国家が、長く存続することは可能なのかどうかを試しているわけである。……われわれの目の前に残された偉大な事業にここで身をささげるべきは、むしろわれわれ自身なのである。それは、……この国に神のもとで自由の新しい誕生を迎えさせるために、そして、人民の、人民による、人民のための政治を地上から決して絶滅させないために、われわれがここで固く決意することである。

(AMERICAN CENTER JAPAN)

6 ナイティンゲール(1820～1910)　クリミア戦争でイギリス軍に従軍し、負傷した兵士の看護にあたった。帰国後は、イギリスで最初の看護師学校をつくった。